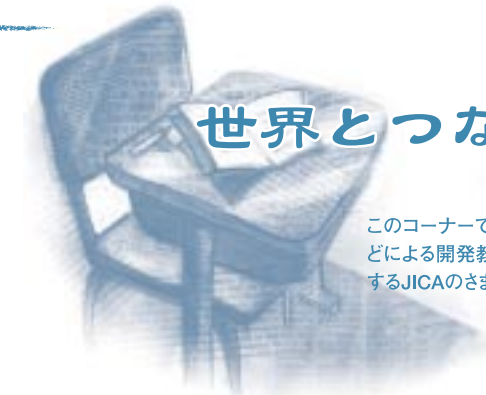


世界とつながる教室

JICAの開発教育支援

このコーナーでは、各地の教育委員会や学校、NGOなどによる開発教育・国際理解教育の実践・普及を支援するJICAのさまざまな取り組みを紹介します。



発展遂げたマレーシアで始まった新しい試み

マレー系、インド系、中国系の3民族が共存する多民族国家、マレーシア。今年、建国50周年を迎えたこの国は、独立以来、順調な経済発展を遂げ、2020年までに先進国入りを目指している。JICAとのつながりは、1956年、マレーシア人技術研修



2007年7月、JICAのエッセイコンテスト受賞者研修に参加した中・高校生と小川さん(左)、ナショナルスタッフのヌルーさん(後列右)や飯塚正利隊員(後列左)らとともに充実した研修をつくり上げた

員の受け入れに始まり、近年は自助努力のみでは課題克服が難しい、経済の競争力強化や高度な知識・技能を備えた人材の育成、環境保全、福祉などの分野でのみ協力を行っている。近い将来、二国間協力は卒業する予定だ。そうした中、JICAマレーシア事務所では今まで培ってきた知見と人的ネットワークを生かした新しい試みに力を入れていく。それは、日本の協力が人々の暮らしに与える影響やマレーシアと日本のつながり、国際協力の大切さなどについて日本人に理解を促し、一人一人に何ができるかを考える機会を提供する。在外発信型「開発教育支援事業」だ。今回初めてその事業を担う企画調査員として、小川久美子さんが同事務所に派遣された。

第6回

在外発信型の開発教育支援

2005年3月から07年9月まで、JICAマレーシア事務所では日本の市民に向けた開発教育支援に取り組んだ小川久美子さん。「参加者の「気付きを促したい」と言う小川さんが、全力投球で挑んだ活動と成果を紹介する。

元JICAマレーシア事務所企画調査員
小川久美子さん

年海外協力隊などのJICAボランティア、日本人学校の教員ら対象の開発教育指導者研修など、より多くの人々が開発教育に携わる機会を設けた。中でも、小川さんが特に手をかけて企画・実施したのが、JICAの国際協力中学生・高校生エッセイコンテストの受賞者研修や教師海外研修の受け入れ、修学旅行生などに向けたスタディーツアーだ。一般的な観光旅行では体験できない現地の人々との交流を重視したプログラムを提供してきた。

「海外に来たら何が起こるか分かりませんが、ある程度のことば自分で解決して欲しいね。日本からやって来た教員や学生らに、小川さんが最初に伝えるこの一言。一見、参加者を突き放しているかのようだが、真の狙いは「用意したものを提供するのではなく、参加者自身がプログラムをつくり上げること」。一貫して「体験型」にこだわる彼女は「五感をフルに使って、現地のあらゆる人やモノに触れ、感動し、気付きを得てもらいたい。そこから、日本の生活を見直したり、自分自身でできることを考えて行動するきっかけになれば」と願う。さらに

気付きを促す仕掛けづくり

「海外に来たら何が起こるか分かりませんが、ある程度のことば自分で解決して欲しいね。日本からやって来た教員や学生らに、小川さんが最初に伝えるこの一言。一見、参加者を突き放しているかのようだが、真の狙いは「用意したものを提供するのではなく、参加者自身がプログラムをつくり上げること」。一貫して「体験型」にこだわる彼女は「五感をフルに使って、現地のあらゆる人やモノに触れ、感動し、気付きを得てもらいたい。そこから、日本の生活を見直したり、自分自身でできることを考えて行動するきっかけになれば」と願う。さらに

は日本人を受け入れるマレーシアの人々にとって学びのある交流を目指している。そのため、訪問した先々で参加者が積極的にコミュニケーションを図れるよう、小川さんは協力隊員や地元の人々と頻りに交流して情報を共有したり、開発教育やマレーシアに精通する専門家などにも協力を求めた。「私の役割はあくまで調整役。豊富な知見と経験を持つ人々とのつながりを密にし、多くの人の力を結集させてこそ、良いものができる」。JICAの国内機関などにも声を掛け、出発前の事前学習や帰国後のフィードバックも欠かさなかった。

こうした努力もあって、06年の教師海外研修に参加した教員たちは、帰国後も自主的に集まって話し合いを重ねるなど、それぞれがより質の高い開発教育の実現を目指して意欲的な活動を継続している。「マレーシアで体験したこと」がすぐに役立つというわけではないかもしれないが、日本とは異なる環境で暮らす人々との触れ合いを通して一人一人の心が豊かになったのなら、私も幸せ。JICAは開発教育のネタをいっぱい持っているのだから、今後もっと私のような役割の仕事をする人



ボルネオ島サラワク州一帯の丘陵地帯で暮らすイバン族の村長(中央)とホームステイプログラムについて話し合う。「ゆったりとした時間の中で生活する彼らとのやりとりは予定通りに進まないことが多いが、自然と共生しながら生きる人々から学ぶことは多い(小川さん)



JICA帰国研修員同窓会で行われた「着物ワークショップ」にて、小川さん(前列右)は帰国研修員とのネットワークも構築し、日本とマレーシアの交流促進にも一役買っている

が在外事務所が増えるという。小川さんはこれまでの活動の総まとめとして、ほかの在外事務所でも開発教育支援事業を積極的に進めるよう、スタディーツアーの受け入れガイドラインや各事業のマニュアルを作成し、広く活用してもらえ体制づくりに努めた。小川さんとともに活動した現地スタッフのヌルー・アシキンさんは、「常に参加者のためにベストを尽くす小川さんは私の目標。厳しい指導を受けるときもありませんが、こだわりの貫く姿勢を見習いたい」と話し、小川さんと同じく「やり上げてきた開発教育支援事業をこれからも続けていく意欲を見せる。」

JICAの在外事務所、青年海外協力隊やシニア海外ボランティアなどの活動支援、安全管理、新規派遣要請開拓のための調査、関係機関との連絡調整などの業務を行う。